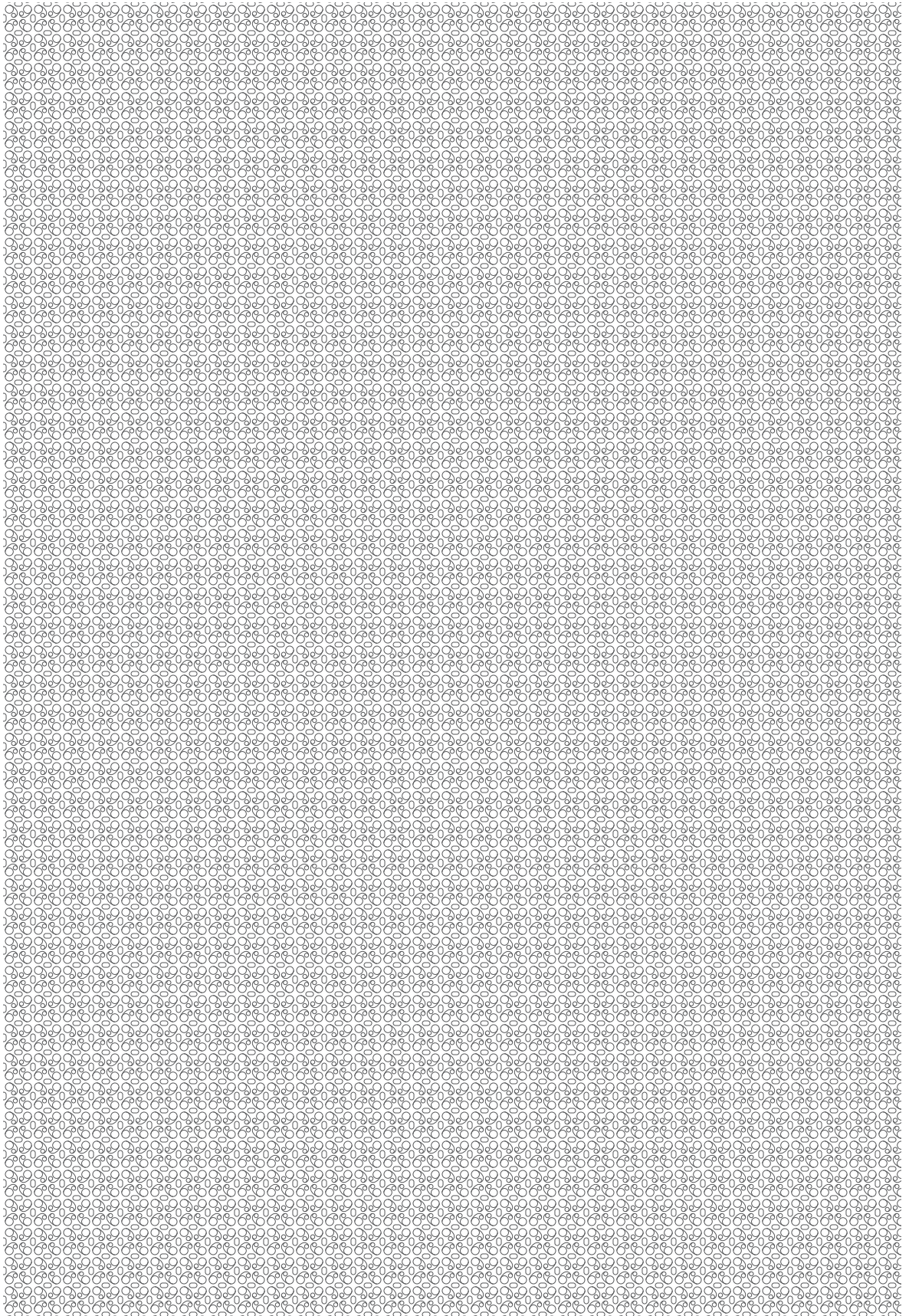


2026年度入学試験問題

国語

(試験時間 14:50～15:50 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、一度マークした箇所を修正する場合、しっかりと消してください。消し残りがあると、解答が無効となることがあります。また、消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあった場合は、当該科目の解答は無効になります。
6. 満点が100点となる配点表示になっていますが、文学部国文学専攻の満点は150点となります。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

人間にとって労働が何を意味するかを考える場合、労働を他の諸活動との連関の下に置く必要がある。世界(人間と自然)に關係する人間的活動は三つの型に区分される——労働(labour)、仕事(work)、行為(action)。これら三つの活動に關する古代ギリシアの見解は、近代的活動⇨労働觀の特質を照し出すことに役立つと思われる。したがって、何よりもまず古代の見解の骨子を再現しておくことにしたい。

労働。古代においては近代人の言う「労働」にあたる言葉はない。けれども、近代的意味での「労働」にあたる活動はある。それは⁽¹⁾基本的に奴隷的労働である。労働は人間が自然的⇨生物的存在であるがゆえに、必ず(必然的に)⁽²⁾ヨギなくおこなわねばならない生命的活動である。生物体であるかぎりでの人間が生物的に生きるためにおこなわねばならない活動が労働であるのだから、労働は何よりもまず自然的必然性に束縛された活動である。自然の必然性(生命の必然性)の全面的な支配下にあるがゆえに、労働という人間的活動はいかなる意味でも自由な活動ではない。労働は誰がやるにしても最も不自由な活動であって、この不自由性のゆえに労働は最も卑しいものとされた。

生命活動としての労働は消費財をつくる。つくられてすぐに消費されるもの、決して耐久性をもたないものをつくる活動、これが労働である。労働の結果はこの世に生れてすぐに消費されるのであって、永続性をもたないがゆえに、くりかえしつくりだされねばならない。したがって労働は、自然の必然性の命ずるままに、日々反復しなければならない。活動における日常的反復性、消費財における非耐久性⇨非永続性、これらは古代的労働觀の特徴となる。労働を停止すれば人間は死ぬ。労働によってつくられた消費物も消費されなければさまざまな腐敗しはじめる。労働と消費物は一体のものであって、束の間(つか)の命という点で同じ性格をもつ。労働と消費物の非耐久性は、それらが根本的に自然の圏内にとどまることから生ずる。労働は必然の領域にある。

生命的必然性の領域、自然の無限の循環の内部に閉じ込められていることが労働の根本特徴であるとすれば、労働という活動は、たしかに人間が行なう活動ではあっても、まだ決して人間にふさわしい活動ではない。必然性に従う労働は動物的である。

動物的労働は、古代的イデオロギーにとっては奴隷的活動、すなわち奴隷にのみふさわしい活動である。プラトンがくりかえし述べているように、古代ギリシアの市民にとって、労働はまともな人間がおこなう活動ではない。労働は人間にふさわしい活動ではないにしても、動物にやらせるわけにはいかない。人間群のうちの誰かが労働を担当しなければならぬ。ポリスの市民が労働をするわけにはいかない以上、外部の人間に労働を肩代りさせるほかはない。このような古代的労働観は必然的に奴隷制を要求する。古代ギリシアでは、ポリスの市民のデモクラシーと経済的奴隷制とは両立することができた。この両者をつなぐものが非人間的活動としての労働という労働表象であった。

仕事。仕事は、古代ではテクネーないしポイエーシスとよばれ、道具制作的活動であり、道具を利用して、消費財と異なる耐久的事物をつくる。仕事はポリスの生活の基盤をつくる。死すべき人間よりも長つづきする耐久的・永続的事物は仕事によってのみつくられる。³⁾耐久的事物の領域は、物的な形式をとった「共通世界」または「公共世界」である。仕事と「共通的事物」(レース・プブリカ)とは不可分である。仕事を担当する職人たちは、古代的労働観からは高く評価されていなかったが、職人たちが行なう活動そのものは、当事者から切断されて高い意義を与えてくれる。仕事はポリスの生活の不可欠の基盤をつくるがゆえに、奴隷的労働よりはずっと格が高い。まっとうな職人が行なう仕事の成果なしにはポリス共同体は立ちゆかない。奴隷的労働が人目にさらされず、私的家族生活と同様に暗闇におかれるべきものだとすれば、仕事は万人の眼の前に、光の下におかれるべきものである。仕事は「明るみ」のなかに、公共的「隠れなさ」の状態で行なわれる。その成果も同様である。仕事は初発から公共性⇨共通性へと方向づけられている。ギリシア的価値意識にとって、「光の下にあつて隠れていないこと」は最も大切なことであった。仕事は、奴隷的労働とちがって、アレテーア(隠されていないこと、真理の光)と直結している。様々の職人的仕事(建築、土木工事、日常品の製作、モニュメントの建造など)の成果を自由につかひこなすが、仕事とは違う、仕事よりも一段と格の高い活動としての行為⇨実践である。

行為(プラークシス)。仕事が用意した物的な「共通的事物」⇨「共通世界」を土台にして、人と人との公共的關係を運営する活動が行為(アクション)またはプラークシスである。仕事の成果たる「共通的事物」を使用することは、ギリシア的四原因論

のうちの目的因の基礎となっていた。職人的仕事の成果は、自由な市民の自由な使用という目的があつてはじめて意味をもつ。生産物の形相と目的が重要であつて、生産物を製作する作用因や材料因は大して重要ではないという古代の労働観は、プラークシスと生産物との目的論的連関なしには理解できない。ところでプラークシスが物的な共通事物を使用することで何をするのかといえ、言説を使つて公共の世界（「政治」）を運営するのである。プラークシスは何よりも言説的・説得的活動であり、現代的用語を使つていえば、言説的意思疎通行為（コミュニケーション）である。プラークシスは理想的には社会関係を非暴力的に運営し、物的な公共の事物の耐久性・永続性と同様に、永続的な政治的社會関係を構築することである。公共のために事物を使用すること（クレーシス）、討議によつて公共世界を構築すること、こうしたプラークシスは人間活動のうちで最も人間的な活動である（ただし、ギリシアの知識人のうちでは、プラークシスの上に更に高貴な活動としてテオーリア⁴観想的活動を立てるものもある）。プラークシスは、仕事以上に公共性の度合が高く、「光の下にあること」、「隠れなさ」の度合も仕事以上に高い。プラークシスのなかでこそ「真理性」が輝き出る。

⁵ 労働、仕事、行為（または実践）⁶ の価値的序列を形成させる観点は、自由と必然、あるいは自由と不自由の観点である。労働は自然必然性に全面的にコウソク⁶されているから不自由である。仕事は必然性の支配を脱する活動であるから自由への一歩である。しかし仕事はなお自然のリズムにあわせた技術的活動であるかぎり、必然と自由の中間にあり、両者の混合状態にある。プラークシス¹¹行為は、仕事の製作物のおかげで、基本的には自然と労働の必然性から全面的に離脱した自由な活動である。人間が真実の意味で自由であり自立していることは、自然必然性、生命的必然性、動物状態と断絶していることを意味している。「自由である」ためには、自然的循環・反復過程から免れていなければならない。単に「生きている」こと、単なる「生命」は非人間的である。単なる生命と労働とは同一視される。単なる生物的生命に関わる活動は奴隷的な活動である。自然―労働―奴隷―必然性はひとつの独立の圏域であるが、これは非人間的であり、たえず人間的自由と自立をおびやかすものと考えられる。例えば、前に挙げた「消費」活動は非耐久性の事物の吸収・消費であり、それは「単に生きること」にすぎない。労働―消費の世界は最も非人間的である。この種の活動観は古代ギリシアで確立したものだ、古代ギリシアにとどまらず、その後

の西洋思想史を貫いて生きつづける。労働が社会的地位を上昇させ肯定的にうけとめられる近代においてさえ、この古代的活動観は支配的ではないにしても、インゼン⁽⁷⁾たる影響力をもちつづける。

では、近代において人間の活動の見方にどんな変化がみられたのだろうか。この点を古代的活動観を念頭において確認しよう。近代の活動観を方向づけるものは資本主義経済である。資本主義的商品・貨幣経済の下では、いっさいの物が交換価値として同質化する。「奴隷的」労働の産物も、職人的仕事の産物も、いやそれどころか行為⁽⁸⁾「質的性格」、各々の物や活動の特異性や異質性は解消し、単なる価値量へと還元される。差異があるとすれば、それは量的差異でしかない。この量化傾向は近代の特徴であって、これが近代の活動観をとらえることになる。

商品・貨幣経済が市民生活を包摂するとき、人間的諸活動の差異とヒエラルキーは解体し、いわば活動のデモクラシー化が進展する。古代的な「労働―仕事―行為」の差別的序列の体系は近代では存立の余地がない。古代的序列が逆転するのではない。古代的な意味での労働・仕事・行為が一線上に並んで同格的になる。別の言い方をすると、近代では労働だけが突出するのである。近代の資本主義的市民社会は何よりも労働社会である。労働が中心になり、労働が社会全体を動かす。人間の諸活動、種々の活動領域は、専ら「労働」の観点から眺められる傾向が強まる。形式の上でも、言葉の上でも、労働、仕事、行為という古代的区別が存在しつづけているとしても、内容面からいえばそれらはすべて「労働」なのである。仕事は労働化する。行為も労働化する。あらゆる活動が労働のなかに溶解する。経済のみが労働社会なのではない。政治も文化も労働社会的になるのである。

近代以前では、古代や中世でみられるように、労働と精神的活動とは決して同一視されることはなかった。ところが近代社会では、精神活動（科学的・哲学的思考、言語活動に基づくあらゆる知的活動）ですら「労働」と等質の性格を帯びはじめる。精神活動に「労働」という用語が当然のように使用されるのがこの傾向を端的に示す。ヘーゲルは、労働に人間精神の形成(Bildung) ⁽⁹⁾ ことこの重要な意義を認めたばかりでなく、精神活動を「精神の労働」(Geistsarbeit) と考えた。フロイトは、夢の働きに「夢の労働」(Traumarbeit) ⁽¹⁰⁾ というタームを使用してさえいる。一九世紀以降にこの傾向がケンチヨ⁽¹⁰⁾ になるし、

二〇世紀に入つてこうした表現は少しも奇異に感じられなくなる。科学的思考も哲学的思考も「理論的労働」とみなされる。芸術的諸活動は、古代的意味では「仕事」であつたが、なお依然として古いミメーシスの性格を残しつつも、傾向としては「労働」の鑄型に流しこまれる。芸術作品といへども商品化するかぎりは、「労働の生産物」として交換価値の尺度圏内に入る。それらはかつてのミメーシスのアウラを喪失し、単なる商品になる。商品の視座は労働の視座である。そして仕事と労働とはかつては区別されていたが、今や両者の区別は全くなり、レイバーといおうとワーカーといおうと同じことの別名でしかない。

こうしてすべての人間的諸活動は労働を範型にし、労働へと収斂しゅうれんしていく。労働社会としての経済的市民社会が圧倒的な優位に立つ以上この傾向は免れがたい。精神的と物質的とを問わず、人間の諸活動、人間生活全体の隅々にまで、いわば労働というエーテルが浸透していくのである。経済社会だけを労働社会と考へてはいけない。政治の面でも文化の面でも労働社会が成立しているのである。社会構成体のあらゆる審級を貫くものとして、あらゆる人間活動をその鑄型にはめこむものとして、労働社会が成立することこそ近現代の特徴といわねばならない。

(今村仁司『仕事』による)

注 プラトン……古代ギリシアの哲学者。 ギリシア的四原因論……ひとつの制作物が生産されるためには作用因(制作

者)、材料因(材料)、形相因(形)、目的因(使用目的)という四つの原因が関与するという考へ。 ヘーゲル……ド

イツの哲学者(一七七〇～一八三一)。 フロイト……オーストリアの精神分析医(一八五六～一九三九)。

ミメーシス……模倣。プラトンは、芸術は模倣の模倣(イデア(理想)を模倣した現実の事物を模倣するもの)とみなした。 アウラ……オリジナルな芸術作品が持っている重みや權威のこと。オーラ。 エーテル……光・熱・電波を伝

える媒体として宇宙に充滿していると考えられていたもの。

〔問一〕 傍線(2)(6)(7)(10)のカタカナを漢字に改める場合、それに使用する漢字を含むものを、それぞれ左の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

(2) ヨギ

A ギゼンのなふるまい

B 仏教のキョウギを学ぶ

C 効果にカイギ的である

D ギシキを行う

E 採決にコウギする

(6) コウソク

A 古風なショウゾクをまとう

B ソクザに断られる

C 血行をソクシンする

D バツソクを設ける

E 結果にマンゾクする

(7) インゼン

A 条約にチヨウインする

B 故郷でインキヨする

C 不注意にキインする失敗

D 生徒をインソツする

E 多くの観客をドウインする

(10) ケンチヨ

A ケンアン事項を解決する

B オンケンな思想

C 二つの仕事をケンニンする

D 事実がケンザイ化する

E チュウケンの社員

〔問二〕 傍線(1)「基本的に奴隸的労働である」とあるが、古代ギリシアにおいてはなぜそのように位置づけられるのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 「労働」は自然の影響を強く受ける活動であり、自然に支配されて自由でないことは動物的であると考えられたから。
- B 「労働」は日常の維持のために行われる点で永続性をもつ活動であるが、単純で創造性のない活動であるとされたから。
- C 「労働」は自然の欲求によって必要とされる動物的な活動であり、欲求はできるだけ抑制すべきものであったから。
- D 「労働」はすぐに消費され耐久性をもたないものしかつくることのできない活動であり、高い技術が必要としないから。
- E 「労働」は危険で不衛生な活動であり、神聖な活動を志すポリスの市民にふさわしくないものとして嫌悪されたから。

〔問三〕 傍線(3)「耐久的事物の領域」とあるが、これは古代ギリシアにおいてはどのように考えられていたか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 耐久的な道具制作の活動は、消費財の制作よりは高く評価されるが、あくまで生活の維持に関わる物的な活動である点で、「労働」と同等の低いものとみなされた。
- B ポリス市民の生活にとって不可欠な、耐久的基盤をつくる「仕事」は、物的な活動であっても公共的な意義を持つものとして「行為」に匹敵するものとして評価された。
- C 自然の限界を超えて存続する耐久的事物を制作する「仕事」は「労働」と区別され、ポリスの公共的世界の運営のための基盤を用意するものとして意義を認められていた。
- D 消費財を制作する「労働」は奴隸のものであったのに対して、耐久性のある事物を制作する「仕事」は公共に貢献するものとして評価されており、それを担う職人たちも尊敬の対象とされた。
- E 耐久的な公共物の制作は、ポリスの基盤となるものとして評価されており、公の場で「仕事」の成果を自由に使いこなす職人たちは、ポリスの共同世界を運営する存在とされた。

〔問四〕 傍線(4)「最も人間的な活動」とあるが、「人間的」な性質として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 言説的 B 永続的 C 非暴力的 D 反復的 E 政治的

〔問五〕 傍線(5)「労働、仕事、行為(または実践)の価値的序列」とあるが、それらの関係の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「労働」は自然の循環に沿った必要不可欠な活動であり、「仕事」は自然と人間をつなぐものとして機能し、さらに「行為」によって人間と自然の調和が果たされる。

B 「労働」は人間を動物としての存在に留めおくもので、「仕事」の技術的活動は人間を動物から成長させる。それによつてはじめて人間的で自由な活動としての「行為」が可能になる。

C 単なる生命としての活動である「労働」は最も自然的だが、道具制作的活動である「仕事」は、技術の介入によって人間を不自然な存在にする。「行為」がその矛盾を統合する。

D 「労働」は奴隷的な不自由として規定されるもので、「仕事」は不自由と自由との混合状態にある。「行為」はそのような不平等な社会関係から自由な公共的世界を構築する。

E 「労働」は自然に縛られて人間的自由をおびやかすものであり、「仕事」もまた自然に影響を受ける点で完全に自由ではない。「行為」はそのような自然的必然性から自立した活動である。

〔問六〕 傍線(8)「量化傾向」の説明としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 精神的なものなどの物質的な量に換算できないものではなく、具体性のある物質が重視されること。
- B 事物や活動はすべてが商品としての価値に換算され、個々の特異性や異質性などの質的差異が消失すること。
- C 公共的世界の運営などよりも、消費財や耐久物の生産活動の方が高い交換価値を持つようになること。
- D 個々の事物や活動の特異性ではなく、制作にかかる時間の長さや生産の量によって価値づけられること。
- E 事物や活動の必要性とは無関係に、より多くの交換価値を持つものだけが商品として選別されること。

〔問七〕 傍線(9)「近代では労働だけが突出する」とあるが、どういうことか。その説明としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 資本主義経済の浸透によって、序列的に価値づけられていた活動はデモクラシー化され、奴隷的労働とみなされた活動の地位は向上し、社会において中心的な価値を見出^{いだ}されるようになったということ。
- B 近代の貨幣経済は、すべての物を量として測定して価値づけるもので、それまで物質性から自由になることで質的価値を持っていた「行為」も量に換算されることで、量的価値を持つ「労働」に圧倒されるようになったということ。
- C 近代では古代ギリシア的な活動の差異的序列は解体されるが、単に「労働」の地位が高まったということではなく、それまで「仕事」や「行為」とみなされていたような活動も、すべてが「労働」としての意味を持つものに変容したということ。
- D 近代の資本主義的価値観においては、物質的な量が大きな意味を持つようになり、古代ギリシアで評価されていたような精神的な活動もまた商品としての物質的価値を生むことが目指されるようになったということ。
- E 近代の資本主義社会においては、「労働」・「仕事」・「行為」の活動のうち、特に経済活動に関わる「労働」が全面化

して見えるようになるが、他の活動も同格の価値を持つものとして政治や文化の面で機能しているということ。

〔問八〕 本文の内容に合致するものとして、最も適切なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 近代においては古代ギリシアにおける活動の価値的序列は解体されデモクラシー化が進んだが、それはすべての活動が「労働」となったことを意味しており、人間的自由に基づく精神的活動ですら貨幣経済に支配されることになった。
- B 古代ギリシアでは、必然性の支配から脱した自由な「行為」に高い価値が置かれたが、近代においては資本主義経済の観点から、必然性に裏打ちされない精神的活動の価値は失われ、「労働」としての性格を求められるようになった。
- C 古代ギリシアにおける活動の価値的序列は、近代における活動のデモクラシー化によって無効化されたように見えるが、長く西洋思想史を貫く影響力を持ち続け、「労働」のなかでも精神的活動がより高く評価されることになった。
- D 古代ギリシアでは、「労働」は奴隷的なものとしてポリスの市民からは遠ざけられていたが、近代の資本主義の貨幣経済の下では、特権的な市民の存在は許されず、すべての人に労働者としての活動が強いられるようになった。
- E 古代ギリシアでは、生命的活動として必要とされた「労働」は、自然の支配から自由でない動物的活動であるとして奴隷に肩代りさせていたが、近代における民主化によって奴隷的労働は解消され、「労働」の価値も上昇した。

二 次の文章は、大学でセクシユアルマイノリティについて教えている教員によって書かれたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。(20点)

教えを乞う行為は、聞く側の欠落を語る側に補わせる行為でもありうる。この点に関して個人的に思い出されるのが、インタビュー記事の原稿確認の際にしばしば編集者から言われる「(差別の問題に関しては)間違いがあつてはいけないので(確認してほしい)」という言葉である。情報が正しいことは当然大事であり、私が記事を確認できることももちろん大事である。しかし、ほかの記事と同様に単に確認を求めるのではなく、差別に関する記事において確認の目的が「間違いのないように」と指定される時、編集者は自身の不安から逃れるためにマイノリティである私を利用してはいないだろうか。誤った、あるいは不適切な記事を作ってしまうことの不安は、編集者とインタビュイーによって平等に分け持たれるべきはずなのに、その責任は、それとなくインタビュイーであるマイノリティの側に負わせられているように思える。

教えを乞うという状況が設定されると、マイノリティの被抑圧性が焦点となりまた根拠となることで、対話の労をむしろマイノリティがより多く取らなければならないことになってしまう(場合がある)¹⁾。困っているマイノリティの方がより「汗をかかなければならない」構造が生まれるとすれば、本末転倒である。

したがって、マジョリテイとしてマイノリティへの抑圧に向き合おうとする立場から、当の抑圧についてマイノリティに教えを乞うべきではない、と戒める文章が書かれることになる。たとえば、「レイシズムに反対するアライのためのチェックリスト」においては、特に白人が陥りがちな問題として、「自身の(あるいは制度上の)レイシズムに関して教育してもらおうとして非白人に依存している」ことが挙げられている。特権をもったマジョリテイをいかに教育するか、について扱ったグッドマンの著作においても、この点は指摘されている。

特権集団の人びとは劣位集団の人々と協働することで多くを学ぶことができる。ただし彼らから何かを教わろうとは思わ

ないことだ。質問することはもちろん適切な行為だが、劣位集団の人々の時間と労力を特権集団の教育に割くことを求めてはならない。話に耳を傾けたり、観察したりなど、情報を得たり理解を深める方法は他にもたくさんある。

教わる側が教える側に対して弱い立場に置かれる、という一般的な事態とは逆に、マイノリティが教える立場に置かれることは、弱い立場に置かれることにもなりうる。したがって、マジヨリテイが「謙虚に教えを乞う」という事態を、そのまま手放しで喜ぶことはできない。それは、暴力的な行為になりうるのである。

しかも厄介なのは、「謙虚に教えを乞う」ことの暴力性を、意図的に行使することもできる点である。そのひとつの事例がシーライオニング (sealioning) と呼ばれる行為である。

シーライオニングは、主に女性に対するオンラインハラスメントの一種であり、「基本的な情報、どこでも容易に見つけられる情報、無関係あるいはほとんど関係のない点について執拗しつこに質問し声高に要求する」ことを指す。このハラスメントは、「ターゲットの忍耐力、注意力、対話の労力を消耗させ」要求に答えきれない地点まで追い詰めることによって、「ターゲットを理性的でない (unreasonable) 人物と印象付ける」ことを意図してなされる。そのため、シーライオニングは一種のDOS攻撃 (denial of service attack、サーバやネットワークに意図的に過剰な負荷をかけてサービスを妨害すること) であるとも言われる。

シーライオニングは、対話の共通の基盤を掘り崩しながら、その責任を相手に負わせることで自身を正しく見せようとする詭弁べんのひとつである。たしかに主張には根拠が必要であり、事実に基づかない議論には意味がない。しかし、ある主張にかかわる根拠や事実にすべて言及することは不可能である。それゆえ、対話は常に共通の前提に基づいてなされるのだが、その作法を意図的に無視することにより、相手に関する「論理的な主張ができない人物」というイメージを第三者に植え付けようとするのである。

ここで注目すべきは、シーライオニングは「知らないふりをすること」による攻撃や暴力の一種でもあるという点である。

シーライオニングにおいては、「基本的な情報、どこでも容易に見つけられる情報」といった、「知っていて当然と思われる」知識こそがむしろ「まだ知らない聞き手に向かって話し手から提示されるべきもの」として攻撃の道具とされる。ヴァインセント・風間・河口は、同性愛者に対する差別に関する分析におけるこのような戦略を「無知の装い」と呼び批判する。「無知」は「知りたくない」という姿勢を隠蔽しながら、その姿勢を維持することで同性愛者を排除する」のである。

シーライオニングと「何に困っているのか教えてください」という「謙虚に教えを乞う姿勢」は、いくつかの点において正反對であるように思える。まず、シーライオニングは攻撃の意図を隠し持っているが、「謙虚に教えを乞う姿勢」の中に攻撃の意図はない。またシーライオニングは無知を装うが「謙虚に教えを乞う姿勢」で尋ねる人は「本当に知らない」。

しかし、「知らない」状態がマジヨリテイに有利に働いている、という点においては、³⁾シーライオニングも「謙虚に教えを乞う姿勢」も変わらない。「教えてください」は、「知らない状態」を維持しつつも「知ろうとしている」アピールをできるという点ではシーライオニングと変わりがなく、しかもその背後に悪意がない点も示せるため、場合によってシーライオニング以上にマジヨリテイに都合のよい立ち位置である。たしかに、マイノリティが求めているのは、自身の被抑圧性についてマジヨリテイに（まずは）知ってもらうことである。では、「謙虚に教えを乞う姿勢」を持つ者は、いずれは「十分に教えてもらったので、もうマイノリティに説明の労をとっていただくには及びません」と主張するつもりがあるのだろうか。そうでないのであれば、それは「謙虚な」シーライオニングにほかならないのではないか。

「謙虚に教えを乞う姿勢」もまた一種のシーライオニングになりうるのであれば、グッドマンが述べたように「話に耳を傾けたり、観察したりなど、情報を得たり理解を深める」他の方法を選ぶのが適切のように思われる。「私に尋ねず自分で調べてこい！」は、乱暴な対応どころかきわめて正当な応答なのである。

しかし、この方針は細かい文脈上の差異に柔軟に対応できるものではない。たとえば、「セクシユアルマイノリティが何に困っているかを多くの人に知ってほしい」と思って普段は教壇に立ったり文章を書いたりしている」私が、授業中に「自分で調べてこい！」といつも主張することは、必ずとは言えないにせよ多くの場合明らかに不適切だろう。したがって、「謙虚であろう

がなんだろうが、そもそもマイノリティに尋ねること自体がどんな場合であれ望ましくない」のではない。

重要なのは、知っている側（マイノリティ）と知らない側（マジョリティ）に共通の対話の平面をどのように作ることができるか、ではないだろうか。「暴力になりえて、しかもそれを意図的に行使用することもできる「教えを乞う」という行為を、マイノリティにとって安全で、マジョリティにとっても実りがあるものとして設定する」作法が必要なのである。

「教えを乞う」行為の暴力性を回避するための作法を、シーライオニングを含むオンラインハラスメントへの対処として提示された「積極的同意 (affirmative consent)」に関する議論の中から引き出すことができる。オンラインハラスメントを回避しつつSNS上でコミュニケーションをおこなうために必要な積極的同意には、五つの要素が含まれるとイムほかは述べる。具体的には、自発的であること (voluntary)、事前情報が与えられていること (informed)、取り止め可能であること (reversible)、トピックが限定されていること (specified)、負担が過剰になっていないこと (unburdensome) である。

積極的同意をいくつかの要素によって構成されるものと考えることで、細かい文脈上の差異に柔軟に対応しながら対話の基盤を作ることが可能になる。それぞれの要素に関する条件を課すか、または課す度合いを変化させるかというパラメータを文脈ごとに動かすことによって、(謙虚な) シーライオニングを避けつつその文脈に適切な対話の共通基盤を設定する可能性が開けるからである。

(森山至貴 『ふつうのLGBT』像に抗して』より)

注

インタビュイー……インタビュアーや取材をされる側の人のこと。 レイシズム……人種差別。 アライ……マイノリティを理解・支持する立場の人々。 グッドマン……大学教員、作家、コンサルタント。 シーライオニング……シーライオンはアシカのこと。シーライオニングの名称はデヴィッド・マルキの漫画に由来する。 ヴインセント・風間・河口……ヴィンセント・キース、風間孝、河口和也。セクシユアルマイノリティについての研究者。 パラメータ……媒介変数。 イム……人間同士の関わりを支援するコンピュータシステムについての研究者。 コンピューターで、プログラムを実行する際に設定する指示事項。

〔問二〕 傍線(1)「困っているマイノリティの方がより「汗をかかなければならない」構造」とは、ここではどういう状況を指す

か。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A マイノリティは日常生活上の困難を抱えているだけでなく、興味本位のマジョリティが勝手に自分たちのことを詮索したり、誤ったイメージを流布したりするので、しばしばそれを訂正する必要があるということ。

B マイノリティはマジョリティに自分たちの困難を知ってもらう必要があることは確かだが、マイノリティの側だけが情報の正誤の確認などに労力を割かなければならず、また責任も負わせられるということ。

C マジョリティは良かれと思ってマイノリティの困難について聞きたがるので、マイノリティはあまり自分たちのプライバシーに関わることを話したくないと思っても、その要求に応えなければいけないということ。

D マイノリティの抱える困難の解決のためには、マジョリティの理解が必要となるが、マジョリティはマイノリティの困難に無関心であるため、マイノリティの側が頻繁に説明の機会をもたなければならぬということ。

E マイノリティは自分たちの困難の解決のためには、マジョリティに受け入れてもらう必要がある、マジョリティの期待に合わせて、理解されやすいマイノリティ像をしばしば演じて見せる必要があるということ。

〔問二〕 傍線(2)「対話の共通の基盤を掘り崩しながら」とあるが、「対話の共通の基盤を掘り崩す」とはどのような行為を指すか。その例としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 話題を限定した上で、議論を徹底的に深める
- B 相手の主張のなかの論理的な矛盾を指摘する
- C 相手の主張について、すべての根拠の提示を求める
- D 相手の主張に関連する話題に発展させて質問をする
- E 基本的な情報についても、必要があれば確認する

〔問三〕 傍線(3)「シーライオニングも「謙虚に教えを乞う姿勢」も変わらない」とあるが、そのようにいえるのはなぜか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 謙虚に教えを乞う人には、実は知ろうとしている自分をアピールしたいという意図があり、相手の印象を下げることで自分を正しく見せようとするシーライオニングと同質の自己中心的なものにすぎないから。
- B 謙虚に教えを乞う人は、自分では純粹に知りたのだと思っているが、自分で調べて知る努力を怠っているというところに、シーライオニングと同様の、実は相手を理解したくないという拒絶の姿勢が隠されているから。
- C 相手を乱暴に攻撃するシーライオニングに対して、謙虚に教えを乞う人は礼儀正しいという態度の違いはあるが、質問を続けて相手を疲れさせたいという意図がある点においてはそれほど大きな差はないから。
- D 謙虚に教えを乞う人には、マイノリティを理解したいという意志はあるが、シーライオニングと同様に、延々と質問し続けられる時間的・精神的な余裕があるというマジョリティの優位性には無自覚であるから。
- E 無知を装うシーライオニングとは違って、謙虚に教えを乞う人は本当に知らないのではあるが、知らないということを利用してどこまでも相手に答えを求めることは、結果的に相手の側だけを疲弊させる暴力になるから。

〔問四〕 本文の趣旨に合致するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A マイノリティの側に大きな負担を強いるような対話は不適切であるため、マジョリティがマイノリティについて何かを知りたい時は、質問するのではなくつねに自分で調べて理解すべきである。
- B これからのマイノリティとの対話は、マイノリティの側だけに負荷がかかりやすい状況を考慮し、積極的同意の五つの要素を踏まえて、いつも一定のルールを適用することが不可欠である。
- C マイノリティの側だけに説明の責任を求めるような対話としないために、マジョリティの側も積極的な説明や自己開示を行うことで対話の共通の基盤を確保することができる。
- D マイノリティとの対話においては、マジョリティは相手の負担を考慮し、つねに同意の条件や度合いを確認しながら進めることで、対話を安全で実りあるものに行うことができる。
- E マイノリティとの対話においては、対話の前に積極的な同意があることが確認されるべきで、その約束が得られていれば、議論の過程で踏み込んだ質問をしても問題はない。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみ余るばかりにて、のちの世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、石山に参る。雪うち降りつつ、道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほどしも、いとあらう吹いたり。

逢坂の関のせき風ふく声はむかし聞きしにかはらざりけり

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり粗造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり。打出の浜のほどなど、見しにもかはらず。暮れかかるほどに詣で着きて、齋屋に下りて御堂に上るに、人声もせず、山風おそろしうおぼえて、おこなひさしてうちまどろみたる夢に、「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに、うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。またの日も、いみじく雪降り荒れて、宮にかたらひきこゆる人の具したまへると、物語して心ぼそさをなくさむ。三日さぶらひてまかでぬ。

(『更級日記』による)

注 ふたばの人……息子の橘仲俊ら。 石山……石山寺。 関寺……逢坂の関近くの寺。筆者が親と上洛したときには、

本尊の弥勒菩薩は「いまだ粗造りにおはする」状態であった。 齋屋……社寺に参籠するとき、身を清めるために籠も

る建物。 麝香……麝香鹿から取れる香料。 宮……祐子内親王家。筆者がかつて仕えていた。

〔問一〕 傍線(1)(5)(8)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 「昔のよしなし心」

- A 前世での良くない心の持ちよう
B 親世代の古くさい物の見方
C 若い頃のとりとめのない思い
D 古風で情緒に欠ける考え方

(5) 「そのほどしめ」

- A ちょうどその時
B 当時と同じように
C 逢坂の関のあたりで
D その時ほどではないが

(8) 「うちおどろきたれば」

- A 少しびっくりしたところ
B 半ばまどろんでいたので
C 不思議に思ったところ
D はっと目が覚めたところ

〔問二〕 傍線(2)「もどかしく思ひ出でらるれば」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 親が物詣でに連れて行くこともしないような貧しい家であったことを恥ずかしく思っている。
- B 大人になっても親を物詣でに連れて行けないままになっているのを残念に思っている。
- C 物詣でに連れて行かなかったせいで親を病気にしてしまったことを後悔している。
- D 親に物詣でに連れて行ってほしいと頼めなかった幼い頃の自分をじれったく思っている。
- E 親が物詣でに連れて行ってくれることもしないで終わってしまったのを腹立たしく思っている。

〔問三〕 傍線(3)「みくらの山につきみ余るばかり」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 山で余生を過ごすような年齢になったということ。
- B 倉に積みきれないほどの財力を蓄えたということ。
- C 山に例えられるほど罪を重ねてしまったということ。
- D 山を越えてあの世に行くほど体が弱ったということ。
- E 子を思う気持ちは倉に入りきらないほどだということ。

〔問四〕 傍線(4)「のちの世までのこと」とは何か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 来世の安楽を願うこと。
- B 豊かな老後を過ごすこと。
- C 今後息子が出世すること。
- D 死後に十分供養されること。
- E 高い身分に生まれ変わることに。

〔問五〕 傍線(6)「むかし聞きしにかはらざりけり」に込められた筆者の気持ちとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 風の音が昔と変わっていないことで思い出した、かつての上京の旅への郷愁。
- B 昔の人が歌に詠んだものと、目の前の光景が同じであることへの純粋な驚き。
- C 自分の境遇が変わったのに対し、風の音は昔と変わっていないことへの感慨。
- D 激しい風の音がいつになっても変わらないことで感じた、自然を畏怖する心。
- E 今自分が聞いている風の音が、遠い日の記憶通りであることへのいぶかしさ。

〔問六〕 傍線(7)「に」と同じ品詞のものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 船に乗るべきところへわたる (土佐日記)
- B 京に思ふ人なきにしもあらず (伊勢物語)
- C ほのかにうち光りて行くもをかし (枕草子)
- D かかるところを見おきて帰りにしままに (蜻蛉日記)
- E 酒飲み、ののしりて、さらに返したまはず (大和物語)

〔問七〕 傍線(9)「よきことならむかし」に込められた筆者の気持ちとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A もっと良い夢が見たかったのにと、これまでの生活態度を反省する気持ち。
- B 悪い夢を見てしまったので、それを良い夢に変えてほしいと祈る気持ち。
- C 夢の意味が分からないので、良い夢かどうか教えてほしいと願う気持ち。
- D 不思議な夢を見たが、きっと良いことの前触れだろうと信じる気持ち。
- E 良い夢を授けてもらえてとても有り難いと、観音様に感謝する気持ち。

